富士太鼓

世阿弥作

ワキ　官人
シテ　富士の妻
ヒメ　富士の娘
狂言　侍者

地は　京都
季は　秋

ワキ詞「是は萩原の院に仕へ奉る臣下なり。さても内裏に七日の管絃の御座候ふにより。天王寺より浅間と申す楽人。是は並びなき太鼓の上手にて候ふを召し上せられ。太鼓の役を仕り候ふ所に。又住吉より富士と申す楽人。是も劣らぬ太鼓の上手にて候ふが。管絃の役を望み罷り上りて候。此由きこしめされ。富士浅間何れも面白き名なり。去りながら古き歌に。信濃なる浅間の嶽も燃ゆるといへば。富士の煙のかひや無からんと聞く時は。名こそ上なき富士なりとも。あつぱれ浅間は増さうずる物をと勅諚有りしにより。重ねて富士と申す者もなく候。去る程に浅間此由を聞き。にくき富士が振舞かなとて。彼宿所に押しよせ。あへなく富士を討つて候。まことに不便の次第にて候。定めて富士が縁の無きことは候ふまじ。もし尋ね来りて候はゞ。形見を遣はさばやと存じ候。

次第二人「雲の上なほ遥なる。〳〵。富士の行方を尋ねん。

シテサシ「是は津の国住吉の楽人。富士と申す人の妻や子にて候。さても内裏に七日の管絃のましますにより。天王寺より楽人めされ参る由を聞き。妾が夫も太鼓の役。

二人「世に隠れ無ければ。望み申さん其為めに。都へのぼりし夜の間の夢。心にかゝる月の雨。

下歌「身を知る袖の涙かと。明かしかねたる夜もすがら。

上歌「寐られぬまゝに思ひ立つ。〳〵。雲井やそなた故郷は。跡なれや住吉の。松のひまより詠むれば。月落ちかゝる山城も。はや近づけば笠をぬぎ。八幡に祈り掛帯の。結ぶ契りの夢ならで。うつゝに逢ふや男山。都にはやく着きにけり。〳〵。

シテ詞「急ぎ候ふ程に。都に着きて候。此所にて富士の御行方を尋ねばやと存じ候。いかに案内申し候。

狂言「シカ〳〵。

シテ「是は富士がゆかりの者にて候。富士に引き合はせられて賜はり候へ。

狂言「シカ〳〵。

ワキ詞「富士がゆかりと申すは何くにあるぞ。

シテ「これに候。

ワキ「さて是は富士が為め何にて有るぞ。

女「恥かしながら妻や子にて候。

ワキ「なう富士は討たれて候ふよ。

シテ「何と富士は討たれたると候ふや。

ワキ「中々の事富士は浅間に討たれて候。

シテ「さればこそ思ひ合はせし夢の占。重ねて問はゞ中々に。浅間に討たれ情なく。

地「さしも名高き富士はなど。煙とは為りぬらん。今は歎くに其かひも。なき跡に残る思子を。見るからにいとゞ猶。すゝむ涙はせきあへず。

ワキ詞「今は歎きてもかひなき事にて有るぞ。是こそ富士が舞の装束候ふよ。夫れ人の嘆には。形見に過ぎたる事あらじ。是を見て心を慰め候へ。

シテ「今までは行方も知らぬ都人の。妾を田舎の者と思召して。偽り給ふと思ひしに。誠にしるき鳥甲。月日もかはらぬ狩衣の。疑ふ所も有らばこそ。痛はしや彼人出で給ひし時。みづから申すやう。天王寺の楽人は召しにて上りたり。御身は勅諚なきに。押して参れば下として。上を量るに似たるべし。其うへ御身は当社地給の楽人にて。明神に仕へ申すうへは。何の望みの有るべきぞと申しゝを。知らぬ顔にて出で給ひし。

下歌地「其面影は身に添へど。まことの主は亡きあとの。忘形見ぞよしなき。

上歌「兼ねてより。かく有るべきと思ひなば。〳〵。しうこうが手を出だし。はんらうが涙にても。留む

べき物を今更に。神ならぬ身を恨みかこち。歎くぞあはれなる。歎くぞあはれなりける。

シテ詞「あら恨めしや如何に姫。あれに夫の敵の候ふぞやいざ討たう。

姫「あれは太鼓にてこそ候へ。思ひのあまりに御心乱れ。筋なき事を仰せ候ふぞや。あら浅ましや候。

シテ「うたての人の言ひごとや。あかで別れし我夫の。失せにし事も太鼓故。たゞ恨めしきは太鼓なり。

夫の敵よいざ打たう。

姫「げに理なり父御前に。別れし事も太鼓故。さあらば親の敵ぞかし。打ちて恨みを晴らすべし。

シテ「妾が為めには夫の敵。いざやねらはん諸共に。

姫「男の姿狩衣に。物の具なれや烏甲。

シテ「恨みの敵討ちをさめ。

姫「鼓を苔に。

シテ「埋まんとて。

地「寄するや鬨の声立てゝ。秋の風より冷ましや。

シテ「打てや〳〵と攻鼓。

地「あらさてこりの泣く音やな。

地「なほも思へば腹たちや。〳〵。化したる姿に引きかへて。心言葉も及ばれぬ。富士が幽霊きたると見えて。よしなの恨みや。もどかしと太鼓打ちたるや。（楽）

シテ「持ちたる撥をば剣と定め。

地「持ちたる撥をば剣と定め。嗔恚の焔は太鼓の烽火の。天にあがれば雲の上人。誠に富士おろしに。絶えず揉まれて裾野の桜。四方へばつと散るかと見えて。花衣さす手も引く手も。伶人の舞なれば。太鼓の役は本より聞ゆる。名の下空しからず。たぐひなやなつかしや。

ロンギ地「げにや女人の悪心は。煩悩の雲晴れて。五常楽を打ち給へ。

シテ「修羅の太鼓は打ちやみぬ。此君の御いのち。千秋楽と打たうよ。

地「さてまた千代や万代と。民も栄えて安穏に。

シテ「太平楽を打たうよ。

地「日も既に傾きぬ。〳〵。山の端をながめやりて。招きかへす舞の手の。うれしや今こそは。思ふ敵は打ちたれ。打たれて音をや出だすらん。我には晴るゝ胸の煙。富士が恨みを晴らせば。涙こそ上

なかりけれ。

地「是までなりや人々よ。〳〵。暇申してさらばと。伶人の姿烏甲。皆ぬぎすてゝ我心。みだれ笠みだれ髪。斯かる思ひは忘れじと。また立ちかへり太鼓こそ。憂き人の形見なりけれと。見置きてぞ帰りける。跡見置きてぞ帰りける。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第六輯』大和田建樹 著